

## 福澤諭吉と『増訂華英通語』

矢 放 昭 文

### はじめに

万延元年正月十三日（2月4日）、福澤諭吉（1835-1901）は木村撰津守（1830-1901）を艦長とする咸臨丸に、木村の随行者として乗船を許され品川沖を出発した。サンフランシスコには旧暦二月二六日（3月17日）に到着している。サンフランシスコに滞在中、中濱（ジョン）万次郎（1827-1898）とともに「ウェブストルの字引」（『福翁自伝』初版1898年、岩波書店版 pp.199.）を、また独自に『華英通語』（『福翁自伝』 pp.124.）を購入している。当時の福澤は英学に対する並々ならぬ熱意で溢れていた。英学への熱意が原動力となり、咸臨丸への乗船を艦長木村撰津守に懇請し、渡米を実現させたと言っても過言ではない。

福澤は購入した2冊のうち、「ウェブストルの字引」については寡黙であり、ごく限られた記述が残るのみである。『華英通語』については、万延元年仲秋、江戸において出版した『増訂華英通語』の自ら記した「凡例」に出版の経緯を原著と同様漢文で記している。その記述によれば：同年春、桑方西斯哥港（サンフランシスコ）で清国商人から購入したこと、仲夏（陰暦5月）に帰国後、英学志向者に広めることを目的として梓行を決断したこと、自らは英学について未だ日が浅いにもかかわらず国家の急務に答えるために同書を訳すべきこと、原著者と目される子卿の業績をたたえとともに、収録英単語・短文の発音・意味がともに漢字・漢文で記されているため、意味は理解出来ても発音を知ることが出来ないこと、そのために浅陋ではあるが訳したこと、な

ど出版の動機などを知ることができる。

だが『華英通語』という漢語で書かれた英書を自ら選び購入したのは、少年期に蓄積した漢学の素養が、福澤の脳裏でごく自然に発動したからである。小稿では、万延元年、帰朝後の秋に福澤が最初に出版物した『増訂華英通語』とその藍本、及びその片仮名表記の特徴などについて判明したこと的一端を述べたい。

### 漢学の素養と蘭学・英学

福澤が英学を志したのは安政六年（1859）、26才の時であるが、英学を始めるまでの福澤は蘭学に専念していた。蘭学を始めたのは21才、長崎に出るからのことである。父親代わりであった兄に勧められ、当時流行の砲術を学ぶにはオランダ語の原書を読めることが必須であるとの進言に従い、中津より長崎に出たことが契機となっている。それまでの福澤の勉学は、当時の一般的状況として、やはり漢学から始まっている。

福澤は天保五年（1835）、大阪の中津藩屋敷蔵に下級武士の家に生まれた。家庭事情と当時の中津藩の厳しい身分制度の下で幼年時代に「手習い（識字）」をはじめ十分な教育を受けたとは思われない。だが14～5才で読書（漢学）に志し、白石照山（1815-1883）の私塾に通学、『論語』『孟子』を皮切りに約4年間で『詩経』『書経』『蒙求』『世説』『左傳』『戦国策』『老子』『莊子』『史記』『漢書』『晋書』『五代史』『元明史略』を通読した。特に『左伝』は全篇を11回通読したと自伝「幼少の時」（『福翁自伝』pp.9-26.）に記しており、漢学に対しての確かな自負心を読み取ることができる。

その自負心は当然ながら漢学者であった父百助（?-1837）の影響が強い。自身の漢学背景について語る福澤の言葉のなかに、父が伊藤東涯（1670-1736）を信奉していたこと、その遺風が家訓の如く自分の精神にも宿っていることを福澤は明確に語る：

「それからもう一つこれに加えると、私の父は学者であった。普通の漢学

者であって、大阪の藩邸に在勤してその仕事は何かというと、大阪の金持、加島屋、鴻ノ池というような者に交際して藩債の事を司どる役であるが、元来父はコンナ事が不平で堪らない。金銭なんぞ取り扱うよりも読書一偏の学者になりたいという考えであるが…ダカラ子供を育てるのも全く儒教主義で育てたものであろうと思う。その一例を申せば…」「…（父は）…その書き遺したのなどを見れば真真正銘の漢儒で、ことに堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心屋漏に愧じずということばかり心がけたものと思われるから、その遺風はおのずから私の家には存していなければならぬ。」（『福翁自伝』 pp.10-11.）

当時の通常では、漢学素読は幼児四五才の頃から始められていたはずである。その点で福澤の場合はかなり遅い。その漢学を志した経緯について自らが語る所では：

「根ッから何もせずにといたところが、十四か十五になってみると、近所に知っているものはみな本を読んでいるのに、自分独り読まぬというのは外聞が悪いとか恥ずかしいかと思ったのでしょうか。…外の者は詩経を読むというのに、私は孟子の素読をするという次第である。ところがここに奇なことは、その塾で蒙求とか孟子とか論語とかの会読講義をするということになると、私は天稟、少し文才があったのか知らん、よくその意味を解して、朝の素読に教えてくれた人と、昼からになって蒙求などの会読をすれば、必ず私とその先生に勝つ。先生は文字を読むばかりでその意味は受取りの悪い書生だから、これを相手に会読の勝敗なら訳はない。その中、塾も二度か三度か更えたことがあるが、最も多く漢書を習ったのは、白石という先生である。そこに四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解すことは何の苦勞もなく存外早く上達しました。」「…白石の塾にいて漢書は如何なるものを読んだかと申すと、経書を専らにして、論語孟子は勿論、すべて経義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩経に書経というものは本当に講義をして貰って善く読みました。ソレカラ、蒙求、世説、左伝、

戦国策、老子、莊子というようなものも能く講義を聞き、その先は私独りの勉強、歴史は史記を始め、前後漢書、晋書、五代史、元明史略というようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大量の書生は左伝十五卷の内三、四卷でしまうのを、私は全部通読、およそ十一度読み返して、面白いところは暗記していた。…」(『福翁自伝』 pp.15-16.)

『福翁自伝』が記すところの、福澤自身が身につけた青少年時期の漢学についての素養とそれに基づく自負心は、蘭学書、英学書を通読し、知識を整理して、論理的に身につける際にも強力な消化能力を形成したはずである。漢籍、洋書を問わず、論理的に述べられた文章を通読し、咀嚼と整理を加えて論理的に構築しあげる力の源泉は、福澤の場合、漢学以外には見あたらないからである。

また、福澤の生涯における漢学との距離の変遷については、金文京 2008 に詳細に述べられている。金文京氏の調査によれば、福澤と白石照山の交流は、明治十一年(1878)、福澤 44 才時の年譜にも確認できる。「…この年、福澤は旧師の白石常人に自著の『通俗国権論』を贈り、白石はその跋文を草した」(金文京 2008、pp.5.) という記事を参考にすることが出来る。

## 英学転向の動機

中津藩より長崎に出て蘭学を学んでいた福澤は、安政三年末(1856) 23 才、大坂に移動し緒方洪庵(1810-1863)の適塾に入り、入塾後まもなく認められて塾頭を務めるなど、心血を注いで蘭学を学んでいた。

25 才になった安政五年(1858)には藩命により江戸に上り蘭学塾を開いている。これより前、嘉永六年(1853)、ペリーの引き入る艦船 4 隻が来航し、翌安政元年(1854)、神奈川条約締結により下田と函館が開港、安政五年(1858)の五ヶ国条約締結後は横浜も開港される時期に至っていた。

翌年、つまり安政六年(1859)、横浜を訪れた福澤は、自分の蓄積してきた蘭学について大きな衝撃を受けた。その時の挫折感を福澤は詳細に語る：

「…店の看板も読めなければ、ビンの貼紙もわからぬ。何を見ても私の知っている文字というものはない。英語だか仏語だか一向わからない。…横浜から帰って、私は足の疲れではない、実に落胆してしまった。…今まで数年の間、死物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことができない、さりとは誠に詰まらぬことをしたわいと、実に落胆してしまった。」  
 (『福翁自伝』 pp.99.)

約6年間に及んで蓄積してきた蘭学について「さりとは誠に詰まらぬことをしたわい」と瞬時に大きな失望感を抱いた福澤である。だが次の瞬間に湧き出た積極的思考も『福翁自伝』は克明に記録している。英学転向を決めた心の軌跡には切実なものがある。:

「けれども決して落胆していただける場合ではない。あすこに行われている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。…何でもあれば英語に違いない。今我国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない、…一度は落胆したが同時にまた新たに志を發して、それから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、さてその英語を学ぶということについて如何して宜いか取付端がない。…」(『福翁自伝』 pp.99-100.)

## 咸臨丸

福澤が横浜で衝撃と落胆を経験した安政六年の冬、徳川幕府は日米修好条約締結の批准書交換のため遣米使節団派遣を決定した。使節団が乗船するアメリカ軍艦ポーハタン号の別船として咸臨丸も同行することになった。英学に熱中していた福澤はこの情報を得るや、アメリカに行ってみたい志をかくさず、艦長木村撰津守への懇請を思い立つ。だが、大坂から江戸に来て一年足らず、特に伝手の無かった福澤は、当時の蘭学医の総本山とも言うべき幕府蘭学医七代目桂川甫周(1826～1881)を介して艦長木村撰津守に乗船を直

訴したのであった。その経緯を福澤はつぶさに、しかも率直に記している：

「…それから私は、桂川に頼んで『如何かして木村さんのお供をしてアメリカに行きたいが、紹介して下さることは出来まいか』と懇願して、桂川の手紙を貰って木村の家に行ってその願意を述べたところが、木村では即刻許してくれて『宜しい、連れて行ってやろう』ということになった。」「…案ずるに、その時の世態人情において、外国渡航など言えば、開闢以来の珍事と言おうか、むしろ恐ろしい命掛けのことで、木村は勿論…その家来という者も余り行く気はないところに、仮初にも自分から進んで行きたいと言うのであるから、実は彼方でも妙な奴だ、幸というくらいなことであつたろうと思う。直に許されて私は御供をすることになった。」(『福翁自伝』pp.107.)

## 英学 2 書の購入と万次郎資料

随行者とは言っても、福澤が頼み込んで随行を許されたものであり、特に幕府側から手当をもらっていたわけではない。全て自費であったため金銭的に余裕があったわけではなかった。そのような経済状況の中で、50 余日の滞在期間中に現地で購入したものは、「ウェブストルの字引」と『華英通語』という華語英語対照の英語教科書の 2 冊であった。

一方、早川勇 2007 の指摘によれば、中濱万次郎が購入したのは 2 冊に止まらないとのことである。手元の『万延元年遣米使節史料集成第 7 巻』「第三節 別艦一行の将来遺品及び図書、4 印刷物」(pp.317-324.) に拠れば、咸臨丸に同乗した中濱万次郎の将来文献として、479 *The Frieded* ~ 487 *U.S. House of Representatives. 33<sup>rd</sup>. Congress.* 計 9 件が記録されている。中濱が購入したウェブスター辞書は New York, Mason Bros. より 1859 年に出版された *An Explanately and pronouncing dictionary of the English Language, with synonyms abridged from the American dictionary of Noah Webster, LL.D. by William G. Webster by Chauncey A. Goodrich, D.D. With numerous useful*

tables. であると記されている。

## 『増訂華英通語』出版とその反応

サンフランシスコで『華英通語』を購入した福澤は、帰朝後の秋に増訂を加えて江戸で出版した。『増訂華英通語』は福澤の最初の出版物である。出版後、世間は同書に対してどのように評価したのか、具に知ることは難しい。だがその一端を、明治～昭和の明治文化研究者として知られる石井研堂（1865 - 1943）『明治事物起源』（明治四十一年 1908 初版、筑摩書房版第 4 冊 pp.544）収録の「片カナ交じりの漢文」と題する小文に見ることができる：

「文章平明を一代の信条とせる福沢先生<sup>ママ</sup>だけありて、先生は漢文にまで、時代の洗礼を浴びせ、片カナ交じりの漢文をも出せり。万延元年に、先生の和訳されし『増訂華英通語』の巻頭に、漢文の凡例あり。福沢<sup>ママ</sup>範子<sup>ママ</sup>困と、漢学者めきし署名も珍らし。その凡例漢文中、片カナ交じへしは、さらに珍にて、日本開闢以来、始めての新体漢文ならん。

ウフ附濁点者ヅバ与ウワ之間音也、

ヌ字、要急音与上字合読之稍近於ン音、而自有別

今日、世間、西洋音を書き現はすに、仮名字ヅヴを常用するは、ここに起因す。ただ解しがたきは、書物の凡例は、漢文に限るとの理由もなきに、何の必要ありて、凡例を漢文にせしか、先生の心事を聞きたかりし。」

福澤が、信条として判りやすい平明な文章を書くことを心がけていたこと、V・W音を原音に即して書き表わすために片仮名ヴ・ヅを考案したことについては、石井研堂以降の研究者も『増訂華英通語』に言及する論考に必ずと言っていいほど指摘している。また、出版後の一時は「英学の福澤」と世間で評されたことがあるとも伝えられている。だが福澤はその経緯について：

「私がアメリカから帰ったのは万延元年。その年に華英通語というものを翻訳して出版したことがある。これがそもそも私が出版の始まり。まずこの両三年というものは、人に教えるというよりも自分でもって英語研究が

專業であった。…この前アメリカに行く時には私に木村撰津守に懇願して、その従僕ということにして連れて行って貰ったが、…」『福翁自伝』(pp.124.)と述べ、人に教えるよりも英学に専念したい、だからこそ木村艦長に懇請してアメリカに渡ったのだ、と自分の気持ちを率直に吐露している。滞在中の英学書入手もその目的の延長上にあつたことはごく自然のことである。

石井研堂の「書物の凡例は、漢文に限るとの理由もなきに、何の必要ありて、凡例を漢文にせしか、先生の心事を聞きたかりし。」との評語は、あるいは福澤の漢学素養の深さを測ることが出来なかったためかも知れない。

この点について福澤自身は明治三十年(1897年)刊行の『福澤全集緒言』「華英通語」において、原本の漢文につられたこと、一方で緒方洪庵の思想に由来する「平易な文章」を肝に銘じていたにも拘わらず、その教示に反しての不安を覚えていたことも記している：

「…此書を出版して後に獨り自ら赤面して遺憾なりと思ひしは、其凡例を漢文に認めたること、皇國又本邦の文字に闕字したることなり。畢竟原本が支那人の手に成りて都て漢文なりしゆゑ自然に之に釣込まれたるか、左りとは緒方先生の訓に背くものなりと心甚だやすからず。」(同書 pp.24-25.)

また、英学を始まるまでの福澤が没頭して読んでいた蘭学書の体裁も影響していたと思われる。福澤が実際に使用したであろう蘭学書、たとえば七代目桂川甫周が完成させた『ドゥーフ・ハルマ』の翻訳書『和蘭字彙』(同書は「安政乙卯(1855)新鑄…侍医法眼桂川周蔵梓」…「安政二年乙卯年夏五月…桂氏學生謹識」の「例言」を巻頭に収録する)の体裁は框郭の段組みこそ異なるものの、『増訂華英通語』とは仕様上の大差を認めることが出来ない。しかも例言はすべて漢文である。訳語も漢文・漢語を基調としている。福澤が『増訂華英通語』序文を漢文で書いた理由はこの点とも符合する。もちろんサンフランシスコで購入した『華英通語』の体裁が直接の要因であることは言を俟たない。

そもそも英学に転向し、英学修得を渴望していた福澤が、アメリカという

異域で『華英通語』という漢籍の一種を購入したこと自体、漢学が福澤の蘭学・英学など洋学修得のための無条件の言語媒体であったことを物語っている。

## 6種の『華英通語』

現存する『華英通語』には：

- (1) 東北大学狩野文庫本『華英通語』（咸豊乙卯 1855 年刊、以下「狩野本」）
- (2) 福澤諭吉『増訂華英通語』（萬延庚申 1860 年刊、以下「福澤本」）
- (3) ハーバード大学燕京図書館蔵『華英通語』（咸豊庚申 1860 年刊、以下「哈佛本」）
- (4) エール大学東アジア図書館蔵『華英通語集全』（光緒己卯 1879 年刊、以下「爺魯本」）
- (5) 大英図書館蔵『新增華英通語』（光緒癸巳 1893 年刊、以下「新增本」）
- (6) 『華英通語』CHINESE AND ENGLISH PHRASE BOOK、BENONI LANCTOT 編 A.ROMAN & COMPANY 1867（以下「LANCTOT 本」）

計6種を数えることができる。

福澤はサンフランシスコで購入した『華英通語』を藍本として「福澤増訂本」を刊行したが、その原本は、慶應大学福澤研究センターの説明では現存していない。

但し「福澤購入本」を考える手掛かりとして「狩野本」を挙げることが出来る。出版年月、語彙分類法、収録語彙数などを併せて判断しても、現時点では、「狩野本」以外は参考にし難い。「福澤本」刊行と同年 1860 年に香港（西營盤）で刊行された「哈佛本」は「狩野本」と同じ版下を使っているにも関わらず、語彙分類及びその排列について「狩野本」とは大幅に異なる。また英語音を示す粵語字音の用法にも「狩野本」と大きな相違があり、「福澤購入本」に該当する可能性はない。以下に「福澤本」についてのこれまでの論考を踏まえつつ、その出版の経緯を探ることにしたい。

## 『増訂華英通語』についての従来報告

『増訂華英通語』について言及した短文および研究類には、梁啓超 1902、豊田實 1939、和田博徳 1962、永嶋大典 1970、富田正文 1992、中嶋幹記 1994、平井一弘 1999a、平井一弘 1999b、平井一弘 2002、矢放昭文 2004、早川勇 2007 などがある。これらの諸研究中で、福澤が購入した『華英通語』藍本の中国語は広東語であるとした和田博徳 1962 の指摘は貴重である。和田 1962 は：「…何故ならば、「華英通語」の中国語には例えば冇 (None)、乜 (What)、佢唔知 (He does not know.) の如き広東語特有の単語や熟語が多い上に、英語の発音記号として用いられた漢字の音も統べて広東音に拠っているからである。更に「華英通語」の中に出てくる中国の地名に広東付近のものが多い事実も、この書が広東で作られたことを裏付けるであろう。」(pp.5.) と対音字の語音特徴を含めて具体的に事例を挙げている。

平井一弘 1999a、1999b、2002 はいずれも『増訂華英通語』について慎重にその内容を検討しており、その成果はいずれも詳細である。但し原本『華英通語』に近いものとして東北大学「狩野本」が有ること、さらに『華英通語』に連なる価値ある資料がハーバードだけでなく英国にも存在していること、音注漢字および「福澤本」本文の各枠内に縦書きの漢語が広東語音に基づいていること、などに気づいていない点は惜しまれる。

## 非鼻音化現象

矢放 2004 は和田 1962 を知らずに藍本の中国語が広東語であることを指摘したのであるが、「狩野本」「福澤本」の使用する英粵対音（和田 1962 の言う「英語の発音記号として用いられた漢字音」）の用法には、当時（つまり 19 世紀中葉）の省城（広州府、南海、順徳）の標準広東語音というよりは、台山、恩平、開平、新會、中山地域で代表的に確認される非（脱）鼻音化現象を見

出すことができる。

また矢放 2010 は非鼻音化現象を「福澤購入本」に最も近いと推定できる「狩野本」(1855 年成立) よりも先、遅くとも 1850 年代までには通行していたと推定されている『紅毛通用番話』(璧經堂本、成徳堂本等) において **bomboo**、**bench**、**beef** など両唇破裂音に中古音明母・微母字が充てられている事実を証拠として確認している。

さらに「狩野本」では「孖」字(明母)が **Mars**、**Mother**、**Merchant**、**Mushroom** など /M-/ 音に充てられるだけでなく、**Baron**、**Robber**、**Sabbathe Day**、**Burma**、**Barbar** など /B-/ 音にも充てられていること、「咩」「乜」「覓」「嘛」などにも同様の使用例があること、また中古泥母字にも /N-//D-/ 両音に充てている例があることから、「狩野本」「福澤本」の『華英通語』英粵對音は広東語に基づくものであり、しかも非鼻音化現象を持っているという事象は動かしがたいことを報告している。

### 金山・サンフランシスコ・カリフォルニア

サンフランシスコは今日の華語(中国語)でも「舊金山」というが、その淵源は 19 世紀中葉の広府(現在の広州市)より西南約 100km 一帯に広がる四邑地域(恩平、開平、台山、新会の四地域、その口語は広州市との差が大きい。)から米国に移住した人々の間の伝聞にさかのぼると思われる。可見弘明 1979 によれば、1847 年、サンフランシスコ近郊コロマにおける金鉱発見により、広東省四邑を中心とする貧農が続々移民として現地に流入している。1852 年～1869 年間に上陸した中国移民は 13 万 2 千人に達しているが、その大半の出身地はこの地域であったと推測されている。福澤がサンフランシスコで『華英通語』を購入したのはまさにこの時期である。

咸豊庚申 1860 年刊「哈佛本」の『華英通語』は香港(西營盤)で刊行されたものであるが、台山(広東)からサンフランシスコへの移民搬送は、当時すでに香港に拠点を移していた「広東幫」により斡旋されていたことも可見

弘明 1979 により明らかにされている。「福澤購入本」もこのルートでサンフランシスコに伝わっていたものであろう。

MARLON K.HOM 1987 'Songs of Gold Mountain (金山歌集)' (同書 pp.11.) にはこの時期の China town の地図が掲載されており、当時の移民生活の一端を想像することが可能である。同書に収録された 226 首の歌詞は文言文を主体とする書面語で記録されているが「冇、乜、咁、睇、搵、吓」などに代表される方言字を頻用しており広東語歌の色彩を濃く反映している。

また趙元任 1951 「台山語料」は当時に到るまでの台山人の会話を記録した貴重な言語資料であるが、その pp.66. に「我寧\*呢, 金山客, 即係到 (從) 金山 (美國) 翻來嘅呢, 該乃華僑呢, 亦係好多。(私はね、金山客、つまり金山 (アメリカ) から戻ってきたんだよ、華僑になるはずでね、他にもたくさんいるよ。)」の記述が録されており、話者にとって「金山」は即ちアメリカと同義語であったことを物語っている。この点も、当時の台山人とサンフランシスコが金山を媒介として密接につながっていたことを物語るものである。

なお同様の文例として A.A.Fulton 1931、pp.100、LessonLXXX. 「過」の項に収録の「你重翻過舊金山唔呢 =Are you going back to California again ?」を挙げるができる。

## 「福澤本」と「狩野本」

福澤が清商より購入した『華英通語』は当時の華人 (中国人) が英語を学ぶために編まれたものであり、英単語・短文集であった。「狩野本」を参考にしてその構成を語れば、各半葉は 2 行 4 段 8 区画で構成され、「三字類」(第 142 ~ 144 丁) は半葉 2 行 5 段 10 区画、「四字類」(145 丁以降) ~ 「長句類」(166 丁) は半葉 1 行 5 段 5 区画で組まれている。各区画内は上段に華語、次に英語、その下に「英粵対音」(つまり英語音を標示する單漢字あるいは漢字群) を記すだけの簡単な構造になっている。

この点に関連して、福島邦道 1967 は『東語簡要』(光緒甲申 1884 年刊) を

解題しつつ：

「…每半葉十区画を作り、ことばは上から下へ並べられ、文字は右から左へ読むようになっている。横列配置など、本邦では福沢諭吉の華英通語（万延元年）に似ているが、福沢は清人子卿のものを和訳したと言っており、当時中国では外国語履修にこういうやり方が一部には行われていたのである。」

と述べ、『東語簡要』の框郭内形式が「福澤本」と共通点を持つことを指摘している。筆者の観察では、この形式は中国では、時代を更に溯って使われていた可能性と予測している。

一方、「福澤本」は各半葉2行8段16区画で始まり、各区画内は上段に華語ではなく片仮名で英語音を標記し、次に英語標記、さらに英粵対音を付記する以外に、各区画内右端に縦書きで華語が付され、その華語の右側に片仮名による和訓を付している。

### 「福澤本」の板木制作

「福澤購入本」は『華英通語』という線装本の漢籍であり、板木ではない。万延元年に江戸で出版したのであるから、当然板木も彫られたはずである。板下作成を依頼された筆耕者は、おそらく原書の線装を解き、一丁ずつ裏返しにして、あるいは鏡などを併用しつつ清書し板下を作成したと考えられる。

「福澤本」(99丁)が「狩野本」(168丁)とほぼ同数の語彙と短文類を収録するにもかかわらず、「狩野本」より大幅に丁数を少なくするのは、まさに各葉の区画段数が2倍だからであるが、框郭内区画を8段に組む例は他にも現存する。

「福澤本」「哈佛本」と同年、つまり咸豊庚申年(1860)に刻本出版された『英語註解』がその一例である。コロンビア大学東アジア図書館所蔵本に拠れば、同書封面に縦書きで記される書名の右下に横書きで“Translated by C.Tan ching”、書名左下に縦書きで「守拙軒藏板」と板元を記している。6種の『華

英通語』と大きく異なる点は、各区画内の英語の下に記される対音（英語音を示す漢字音）が広東語ではなく北方官話系の語音に基づいていることである。

また福澤当時の木板印刷術の板組技術から言えば、4段組を底本にして8段組にすることにさほど困難は伴わない。福澤は帰朝後この方法採用を依頼して4段組を8段に組み替える工程を採用し刊行したのであろう。

但し、中野三敏 2011 に拠れば、江戸時代の板組みの費用は高額であった。当時の福澤は金銭的に余裕がなかった筈であり、出版資金の問題は別途に考証する必要があるかもしれない。筆者の見る「福澤本」は封面中央に縦書きで「増訂華英通語」と書名を印刷する一方、左下に「快堂蔵板」と記している。「快堂」は福澤ではなく、あるいは出資者を指すのかも知れない。

## 俗字体

手元の「福澤本」と「狩野本」を対照すると以下の数点を知ることが出来る。

(1)「福澤本」に収められる福澤直筆の「凡例」は半葉 10 行、1 行 20 字、計 28 行 3 半葉の紙幅を使い詳細に出版の経緯を述べている。この序文の木活字体は福澤が持ち帰った原本とは異なり、福澤が増訂版行する際に刻された字体であると判断される。その中には「サンフランシスコ」の音訳を「桑方西斯哥港」とするなど、今日の中国語で通行の「哥」ではなく「哥」に替えて表記する点が見られる。原本の字体を忠実に踏襲しようとしていることを示すものである。「哥」字は『狩野本』だけでなく大英図書館に伝わる書写資料（例えば Or.10886 『大英俗語抄本』、Or.7428、Or.7415 及び内田慶市 2009 所収『夷音輯要』などの書写資料においても確認することができる。

但し、劉復・李家瑞編 1930 『宋元以来俗字譜』では「哥」の俗字「哥」には『古今雜劇』（元刊本）以来の使用例があり通用範囲は広く原本を考察する上での参考価値は低い。

時代と地域を絞り込むことが出来るという点で価値の高い俗字として「器」

の俗字体「罌」「罌」を挙げることが出来る。『宋元以来俗字譜』（pp.12.）の掲載に従えば「罌」は清同治年刊（1862-1874）刊行の『嶺南逸史』にのみに収録されている。つまり19世紀の嶺南すなわち広東地域に通行した濃い地方色を持つ俗字といえる。いま「狩野本」「福澤本」「哈佛本」「爺魯本」4種の『華英通語』でその使用例を調べると、以下の如くにまとめることができる：

	分類目録（巻頭）	本文中
狩野本	器用類、工器類	工罌類（百十六丁等）
福澤本	器用類、工器類	工罌類（六十三丁等）
哈佛本	器用類、工器類	工罌類（四十六丁等）
爺魯本	器用類、工器類	罌

「狩野本」は巻頭「分類目録」では「罌」のみを使用し、本文中では「罌」を使用している。「福澤本」は巻頭「分類目録」ではいずれも旧来の「罌」のみを使用し、本文中で「罌」を使用する。「哈佛本」は「分類目録」では「罌」「罌」併用、本文中は「罌」を使用する。「爺魯本」は「分類目録」では「哈佛本」に同じである。但し「爺魯本」は上巻のみ現存し下巻を見ることが出来ないため、本文中に「罌」が使われていたかどうかは不明である。「軍罌匠」「金罌」「鉄罌」など「罌」を使う例は多い。

さらに、字体「門」について「福澤本」と「狩野本」で扱いが異なっている点も注意しなければならない。「福澤本」は「門」「門」を混在させるが、「狩野本」は現代漢語の簡体字と同様「門」字体で統一している。この違いは、「福澤本」板下の筆耕者と「狩野本」板を刻した清末華南の“手民”の間の、字体についての認識の差異に由来すると思われる。前者は、刻字の際に字形を優先させたものの脳裏にある正体字形が時折無意識に作動したが故に統一出来ず混在させたものであり、後者は字形を表音的にとらえていたがために迷いがなく俗字体で通したものと推定できる。その一部を示すと以下の如くで

ある：

英語語彙	福澤本 (1860)	狩野本 (1855)
月 Moon	們 (1丁右)	們 (5丁右)
月虧 Edipsed of the moon	---- 們 (1左)	---- 們 (6左)
金剛石 Diamond	坭們 (9左)	坭們 (21右)
一月 One Moon	溫們 (12左)	温扞 (26左)
欠単 Bond	捫 (14左)	扞 (30右)

(2) 「蓋聞言之無文，不可以行遠也。…」で始まり「咸豊乙卯蒲節後二日何紫庭序」で終結する序文の文章は「狩野本」「福澤本」双方で全く同一である。また字体についても相同と言ってよい。物理的手段を使用して写したものである。但し字間については若干の差異を認めることが出来る。それでも「狩野本」と「福澤本」は福澤がサンフランシスコで入手した藍本序文を字体も含めてそのまま収録していることは間違いない。但し一行あたりの字数は「狩野本」と異なり、「福澤本」は13字乃至14字、計17行、「狩野本」は11字、計21行となっている。この点は、「福澤購入本」と「狩野本」の板下の違いを示している。

(3) 「何紫庭序」に続く「目録如左」については、「福澤本」は福澤が加えた「凡例」と同じ字体で刻されているのに対し、「狩野本」は「協徳堂蔵板」に由来する字体で刻されている。その違いは一目瞭然である。「福澤本」字体は江戸の筆耕者のものである。

(4) 「目録」に掲出される「分類項目」については、両本とも5段に組んでいるが「福澤本」は、例えば1段目を例にとると「天文類」「地理類」「人倫類」「職分類」「国寶類」「五金類」「玉石類」「数目類」「時節類」「刑法類」計10類にわけ、2段目、3段目、4段目もそれぞれ10類に分けるが、最下段は「四字類」「五字類」「六字類」「七字類」「長句類」「単式類」計6類に分ける。

一方「狩野本」1段目は「人倫類」を建てず計9類を建て、2段目～5段目

まですべて9類にわけると。また本文中では「職分類」に続いて「人倫類」を建てており第13帖「五倫」「父母」に始まり第17帖右「工 Mechanics」「商 Merchants」まで収録している。「狩野本」は9類5段で均等排列を目指したものである。

(5) 両本ともに「目録」に続いて「一 凡所傳之英語因我漢書或無此音故間有未能畢肖者…」より「一 凡用漢字註脚内、有兩小字相連、需要急口合讀之、此一定不易之法也、學者其究心焉」までの計5凡例を収録しているが、その文章はまったく同一である。「福澤購入本」が「狩野本」と同じ凡例を持っていたことが判る。凡例文は両本ともに一行あたり最多20字、計10行で排列される。この点では、「福澤購入本」「狩野本」は一致する。「福澤本」の字体と「狩野本」は異なる。「福澤本」は江戸の筆耕者、「狩野本」は「協徳堂蔵板字体」により刻されている。

(6) 「狩野本」の「天文類」冒頭には2区画を使い「The body of the heavens is apparently spherical like a globe &c, Its breadth is immeasurable, 呢摩呢 阿父 呢 唏分時 衣時 鴨巴連<sub>レ</sub> 時啡<sub>レ</sub> 加俛 礼詎 垂 呀笠, 咂对 嘛列士 衣士 嘸鳴沙<sub>レ</sub> 叱布<sub>レ</sub>, 天體渾圓若球其廣莫測也」という記述がなされているが「福澤本」では存在しない。又、同様の事例は他にも散見する。

(7) 「福澤本」と「狩野本」の間には収録語彙数に出入りがある。その詳細については別の紙面により報告するが、「綢緞類」「顔色類」「茶葉類」「食物類」「飛禽類」「魚蝦類」「器用類」「房室類」「菓子類」など16類に及び、特に「房室類」については「福澤本」は16語彙多く収録している。

(8) 英語 /r/ 音字について「福澤本」は *r* (例えば第98帖右、or、for) と *v* (例えば第97帖左 *Sin*) を混在させるが「狩野本」は *r* で一貫している。

以上の8点より判断するに、「福澤購入本」と「狩野本」は極めて近い関係にあることが判明するが、詳細にみると「福澤購入本」即「狩野本」とはならない。

いずれにしても、これらの違いが「福澤本」刊行時の編集によるものなのか、

あるいは別系統の板本が存在したのか、今後とも検討を続ける必要はある。

## 福澤の片仮名表記の特色とオランダ語

英語音 /v-/、/w-/ の片仮名表記を、福澤はウワに濁点を付けヴ、ヅと表音している。この点は石井研堂が評する如く、英語音を実情に近く表わすものとして幕末から明治にかけて広く社会に受け容れられた。特に /v-/ をヴと表音する方法は今日に至り定着していると思われる。

一方、英語音のもう一つの特徴である /r/ 音については、福澤は字体を小さくするものの常に「ル」標記を付している。音節中位では、Worth:ウヲルズ、Cargo:カールゴ、Yesterday:エスタルデー等が、音節末尾では、Father:ファールザル、Mother:マーザル、Brother:ブラザル、Your:ユーアル、are:アール、Over:オーヴル、For:フヲール、sure:シユール、whether:ホザル、sir:シヤール、などその例は全篇を貫く。

この点については、中濱万次郎『英米対話捷徑』の片仮名表記と全く趣を異にしている。同書は福澤、中濱の両者がともに咸臨丸で渡米したその前年、つまり安政六年(1859)に、中濱が土佐藩の子弟に英語を教えるために編集した教材であるが、そこでは、ground:グラワン、star:シタアン、north:ナウス、North Star:ノヲスタン、river:レバ、spring:シプレン、summer:シヤマ、winter:ウイング、thunder:サンダ、など/r/音については語中、語尾に関わらず、前置の母音と結合した表記をとっている。

両者の片仮名表音の違いについては、夙に豊田實 1939 の記述があり、『英米対話捷徑』の表音については:「彼地の學校教育を受けてつ歸つた中濱氏が、單語の綴に拘泥せず、米國の、しかも訛のある發音をそのまま、假名で表はわさうとしたものである」(pp.173.) と評し、福澤の表記については:「…中濱万次郎の場合とはちがひ、目から這入つた英語における發音の間違ひである。さうして斯く目から入つた英語の發音の誤といふことは、わが國の英語の研究が次第に進み、讀書本位となるに及んで益々甚だしくなり、一面今日に及

んでゐるのである。」(pp.176.)と述べ、万次郎による片仮名の英語表記が現実音に即したものであるのに対して、福澤の表記は「目から入った」つまり「読解を優先した」表記である、という英学修得についての両者の基点の違いの大きさを指摘すると同時に、福澤の表記が象徴する読解優先志向が20世紀前半の英学を大きく覆っていたことを概括している。

豊田實 1939 の言う如く、福澤の片仮名表記は「目から入ったもの」の産物であることは間違いのないところである。だが福澤の場合、その片仮名表記は先行基準に従った蓋然性が大きい。その基準はおそらく福澤がかつて心血を注いで学んだ蘭学書にあるという点が小稿で指摘することの一つである。

繰り返しになるが、福澤が英語語彙の音節中位もしくは末尾に小文字の「ル」を充てるその由来は、福澤以前のわが国における蘭学書に根拠を求めることができる。いま手元で参照する『阿蘭語文典』1918によれば：

音節中位：

- pp.23     karbonkel   カールボンケル (紅玉)
- pp.23     storm     ストルム (暴風雨)
- pp.28     verwantschap   フェルヴァントスカップ (親戚)
- pp.28     leerling   レールリング (徒弟)
- pp.33     werkman   ウェールクマン (労働者)
- pp.34     hart     ハルト (心)
- pp.40     vork     フォルク (フォーク)

音節末尾 (特に長母音の後)：

- pp.27     lessenaar   レッセナール (机)
- pp.34     heer     ヘール (君)
- pp.37     leer     レール (訓)

としており、福澤のように音節末尾もル表記を付している。ここに引用する『阿蘭語文典』は江戸中期の蘭学者大槻玄澤 (1757-1827) が撰述した『蘭語階梯』を参照しており、蘭語についてのカタカナ表記も大槻玄澤以来のものと推断

できる。また蘭学専修時代に福澤が参照していたと推測される蘭学書の片仮名表記も視野に入れるべきである。

七代目桂川甫周が安政二年（1855）に刊行した『和蘭字彙』によれば、**hart**：ハルト（Z-19 丁）、**kerk**：ケルク（Z-14 丁）、**regter**：レグトル（W-79 丁）、**winter**：ウイントル（W-67 丁）、**Naarden**：ナールデン（V-49 丁）、**Amsterdam**：アムストルダム（V-2 丁）、**Ierland**：イールランド（U-37 丁）、**quartel**：クワルテール（Q-4 丁）、**queeker**：クワーケル（Q-3 丁）等の例を拾うことが出来る。

また「安政丁巳新鑄」（1857）の『増補改正譯鍵』（大野藩廣田憲寛蔵梓）によれば、**bier**：ビール、**turky**：トルコ、など今日通行の語彙でも /r-/ は小文字の「ル」と表記されており、片仮名音訳されていたことがわかる。

漢字でもカタカナでも、ひとたび表記として定着するとその生命力は強い。今日でも我々はオランダつまり **Netherlands** を「ネーデルランド」と表記し発音する。**Nethe-rl-ands** の **-rl-** 部分を **-ルラ-** という表記に基づいているからである。だが実際のオランダ語音では直前の母母音に反映し、英語「ネーデルランド」に極めて近いと言われている。

オランダ語の /r/ 音についての福澤の時代に比較的近い記述として、E. KRUISINGA1924（川崎直一譯）によれば、同書ではオランダ語の /r/ 音を、所謂 **sonorant**（音節主音となり得る子音）類を「母音類似音」として分かち、**[l]・[m]・[n]・[ŋ]** に続いて以下の如くに記述する：

「19. オランダ語の **[r]** は舌の尖をふるはすことによって発音される。しかしながら自由母音（**free vowel**）の後では、それはむしろ開放子音である。そして子音がそれに続いてあるときは特にさうである。**[r]** のこの二つの種類はあらゆる位置に（語末においても）ある。…（略）…」

20. オランダの西部では多くの人たちは舌尖の **r** を発音しない。しかしそこで一般的である‘後舌の **r**’はけつしてその発音方法が一樣ではない。それゆゑこれは外國人が真似すべき音ではない。」

この記述を敷衍して解釈すると、オランダ語の /r/ 音を、福澤のように「目

から入って」片仮名で表記する場合、英語の /r/ が直前の母音に吸収される傾向にあることよりも独立性が強いために「ル」で表記せざるを得なかったと思われる。(なお E.KRUISINGA の言う「開放子音」とは閉鎖音 (stops) に対する子音類であり、今日の破擦音、摩擦音に相当する。)そしてこの表記法は福澤以前から、あるいは江戸中期よりわが国で行われていた蘭学の表記法に由来すると考えるほうが合理的である。

## 小結

福澤は安政六年横浜で挫折を味わったあと英学に転向したが、その後、九段下の蕃書調所に入門し、英蘭対訳の字書を借用して英語を自習している。さらにその後には；

「…始めはまず英文を蘭文に翻訳することを試み、一字々々字を引いて、ソレを蘭文に書き直せば、ちゃんと蘭文になって、文章の意味を取ることに苦労はない。ただその英文の語音を正しくするのに苦しんだが、これも次第に緒が開けて来ればそれほどの難渋でもなし、詰まるところは…英学に移ろうとするときに、真実に蘭学を捨ててしまい、数年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違ひの話で、実際を見れば蘭といい英というも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭学を読む力はおのずから英書にも通用して、決して無駄でない。水を泳ぐと樹に登ると別のように考えたのは、一時の迷いであったということを発明しました。」(『福翁自伝』 pp.104.)

と述懐し、英学に蘭学の蓄積を役立たせることに積極的な意味を見出している。

『福澤本』に見える /r//r/「ル」は、福澤の英語発音表記がオランダ語風を抜けきれなかったことの証しであろう。福澤の蘭学・英学の第一義は「読む力」であり、発音はその次に重きを置かれたものであった。また、福澤の「読む力」に大きく貢献していたのは「漢学の素養」であった。

## 【参考文献】

- (1) 福沢諭吉著、富田正文校訂『福翁自伝』岩波文庫、1978年第1刷。
- (2) 梁啓超 1902「論學術勢力左右世界」、『新民叢報』No.1.『飲冰室文集』大孚書局版、卷二、學術類、pp.206.
- (3) 豊田實 1939『日本英學史の研究』、岩波書店、pp.172-176.
- (4) 和田博徳 1962「福澤先生の処女出版『増訂華英通語』の原本」、『三色旗』169号 pp.5.
- (5) 福島邦道 1967「『東語簡要』解題」、『纂輯日本譯語』、京都大学國文學會編、pp.240-241.
- (6) 永嶋大典 1970『蘭和・英和辞書発達史』、講談社、pp.53.
- (7) 内田慶市 2009『言語接触とピジン— 19世紀の東アジア』、白帝社、pp.357-383.
- (8) 早川勇 2007『ウェブスター辞書と明治の知識人』春風社、pp.198-210.
- (9) 富田正文 1981「万国政表と華英通語の出版」、『福澤手帳』28号、pp.16-19.
- (10) 富田正文 1992「『増訂華英通語』の出版」、『考証福澤諭吉』(上)、岩波書店、pp.172-181.
- (11) 金文京 2008「福沢諭吉の漢詩 (1) 序説—福沢諭吉の漢詩について」『福澤手帖』138号、pp.1-7.
- (12) 『万延元年遣米使節史料集成第7巻』日米修好通商百年記念行事運営会編、風間書房、昭和三六(1961)年.
- (13) 中嶋幹記 1994「粵語の研究史」、『現代広東語辞典』大學書林巻頭、pp.XX.
- (14) 可見弘明 1979『近代中国の苦力と薔花』岩波書店、pp.29-33. 同書 pp.31には1852-1869間にサンフランシスコに上陸した中国移民数、香港よりサンフランシスコに向った移民数の年度別統計などが掲載されるのみならず、当時の移民輸送が香港を活動拠点とする広東幫によりほぼ独占されていたことも詳述されている。
- (15) 平井一弘 1999a「福澤諭吉『増訂華英通語』の「音訳」と「義訳」、『大妻女子大紀要』31、pp.65-103.
- (16) 平井一弘 1999b「福沢諭吉『増訂華英通語』の俗語訳文」、『大妻女子大学英文学会大妻レビュー』32号 pp.139-158.
- (17) 平井一弘 2002「福澤諭吉『増訂華英通語』とハーバード版『華英通語』」、『大妻比較文化学部紀要』3号 pp.106-115.
- (18) MARLON K. HOM 1987 'Songs of Gold Mountain' CANTONESE RHYMES FROM SAN FRANCISCO CHINATOWN, University of California Press.
- (19) A.A. Fulton 1931 "PROGRESSIVE AND IDIOMATIC SENTENCES IN CANTONESE COLLOQUIAL".
- (20) 劉復・李家瑞編 1930『宋元以来俗字譜』、『史語所單刊之三』、pp.10.
- (21) 趙元任 1951『台山語料』、『史語所集刊』23上、pp.38-71.

- (22) 矢放昭文 2004 『『華英通語』の価値について』『東方』285、東方書店、pp.7-11.
- (23) 矢放昭文 2010 「英粵対音資料與鼻冠音」、遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子主編『清代民漢語研究』學古坊、首爾、pp.395-409.
- (24) 中濱万次郎著『英米対話捷徑』1859年刊、早稲田大学古典籍総合データベース [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_c0733/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0733/index.html) に拠る。
- (25) 日蘭通交調査會編纂『阿蘭語文典』（未定稿）大正7年（1918）11月刊、天理大学図書館蔵。
- (26) E. KRUISINGA 1924 “*A Grammar of Modern Dutch*”、London. 川崎直一譯『現代オランダ語文法』三省堂、昭和19年（1944）初版、pp.6-7. 天理大学図書館蔵。
- (27) 七代目桂川甫周（1826～1881）安政乙卯新鐫『ドゥーフ・ハルマ』翻訳書『和蘭字彙』、1855. 天理大学図書館蔵。
- (28) 大野藩廣田憲寛蔵梓『増補改正譯鍵』「安政丁巳新鐫」1857、天理大学図書館蔵。
- (29) 中野三敏 2011 『和本のすすめ』岩波新書、第3章、pp.122-162.
- (30) 『福澤全集緒言』（『福澤論吉全集』巻一、岩波書店1968年）。福澤の求めた「平易な文章」の重要性は緒方洪庵の教えによるところが大きい。その点は：「……就いては精々文字に注意して決して難解の文字を用ふる勿れ、……此知字の學者が洋書を譯するに難字難文を用ひんとすれば、唯徒に讀者の迷惑たる可きのみ、……返すがえすも六かしき字を弄ぶ勿れ云々と警められたる先生の注意懇到、……余は深く之を心に銘じて爾來曾て忘れたることなし。」（『緒言』 pp.5.）という述懐からも知ることが出来る。